

ほくと遺跡ものがたり

遺跡が語る北斗の歴史 第9回

はるかむかし、旧石器時代・縄文時代から現代に至るまで、一万有余年の間にこの北斗の地で営まれ続けた人類の歩み―当コーナーでは、こうした北斗の歴史について、「遺跡」に焦点をあてて紹介します。今回は、現在私たちのくらす北斗市の元になった村々が、江戸時代半ばから幕末にかけてのよう生まれ成長していったかについて紹介したいと思います。

前回は、現在の北斗市にあたる地域がアイヌの人々と和人とが混ざり合いながら暮らしていた「緩衝地域」であったことと、それが寛文9（1669）年に起きたシャクシャインの戦いをきっかけとして徐々にアイヌの人々がこの地域を離れ、その結果次第に「和入地」へと変わり行きつあったことを紹介しました。

これがちょうど今から300年ほど前のことですが、ここを起点とした幕末までの約150年間は、時代の歩みとともに、現在の北斗の街並の基礎となる村々に生まれ成長した時期にあたります。

現在、北斗市地域の地名や地勢の変遷について、各地に現存する江戸時代当時の文献史料について調査を進めており、現時点で93件の史料（史書記録9、日

記・紀行文43、里程記4、古地図37）からデータを集めることができています。

今回は、それらを時系列順に整理して各村の系譜をみちびき出し、さらに一定期間ごとの各村戸数のデータを加えて、それぞれの規模の変遷と成長を追うことができるように図化しました（左ページ）。この図と各時代についての概略を元に、現在の北斗のまちの基礎がどのように形づくられていったのかを見てみましょう。

先にも述べたとおり、現在の北斗市地域においてアイヌの人々は徐々に蝦夷地への移住などによって姿を消し、18世紀半ばごろには文献の中にも彼らの居住を示す記述・記録がみられなくなっています。それとほぼ時を同じくして、かつて寄港地として賑わっていた亀田がその勢いを弱め、入れ替わるように箱館が港湾都市として急成長を遂げていきます。

『松前蝦夷記』（享保2・1717年）によると、当時亀田港は徐々に遠浅となつて船を泊めにくくなつており、多くの船が向かいの箱館港へ船を泊めるようになってきている…とあります。すでに主産物である昆布の船積所であった箱館ですが、この頃を期に内海状の地形が港として利便かつ蝦夷地産物の取引でも立地上優れているなど、交易拠点としての適性を高く評価され、「松前三湊」の一つと

して大きく成長していくこととなります。こうして箱館の価値が増すとともに、箱館と松前とをつなぐ海岸沿いの街道、そしてそこから「和入地」の外へ蝦夷地へ陸路向かう際の主要ルートである街道

もまたその価値を増していきます。この両街道における南北の要地である、戸切地・有川および大野が戸数を増やし成長を遂げるのがちょうどこの頃、18世紀半ばから後半にかけてです。また、これと時を同じくして文月・一ノ渡・濁川などの村々の名前が史書の中に現れるようになります。南北両村の近傍および街道上に新たな村々が広がる様子が読み取れます。

文化4（1807）年、ロシアからの北方防衛のため、江戸幕府は松前家から蝦夷地を上知（没収）し直轄します。幕府は蝦夷地直轄にあたり箱館周辺の新田開発に取り組み、有川・大野に会所を設け移民を募り新田場を拓きます。

田草川伝次郎の『西蝦夷地日記』（文化4・1807年）には中ノ郷、高麗鱗平の『蝦夷地巡回之記』（文化6・1809年）には一本木・千代田・本郷の各村が新田場として記録されています。残念ながらこの時は稲作が定着しませんでした。この入植が後の北斗市東部に広がる農地の基盤となったといえるでしょう。文政4（1821）年、松前家が蝦夷

地に復領し、幕府から北方防衛の任務を引き継ぎます。北海道沿岸各所に設けられた防衛拠点へ赴くため、その経路および体制が整備されます。馬継所および勤番泊所が設けられた三ツ谷・富川・茂辺地・当別の各村がこの時期に戸数を増やしているのは、これに伴うものでしょう。安政2（1855）年、前年の日米和親条約締結と箱館開港を機に幕府は再び松前藩から蝦夷地を上知し直轄します。

この時期に大きく戸数を増やしているのが大野と一ノ渡です。再直轄による北方防衛に伴い、陸路による北方との往来が増加した時期でもあります。その経路上の両村の成長につながったのでしょうか。また、この再直轄の際も幕府は移民らによる開墾を奨励し（御手作場）、戸切地に吉田郷・三ツ谷村に御用畑（後の三好郷）が拓かれ、また濁川村に移民による清水村が拓かれます（三ツ谷村と三好郷は明治になって合併し谷好村、濁川村と清水村も同じく合併し清川村となり、現在ものこる地名の元となります）。

こうして地域のなりたちをひも解いていくと、わたしたちの住む北斗市地域は、東西南北に人々を繋ぐ街道と、そこをさまざまにひと・ものが行きかう中でつむがれた歴史とともに成長した歴史と文化の交差点であったことがわかります。（郷土資料館 時田 太郎）

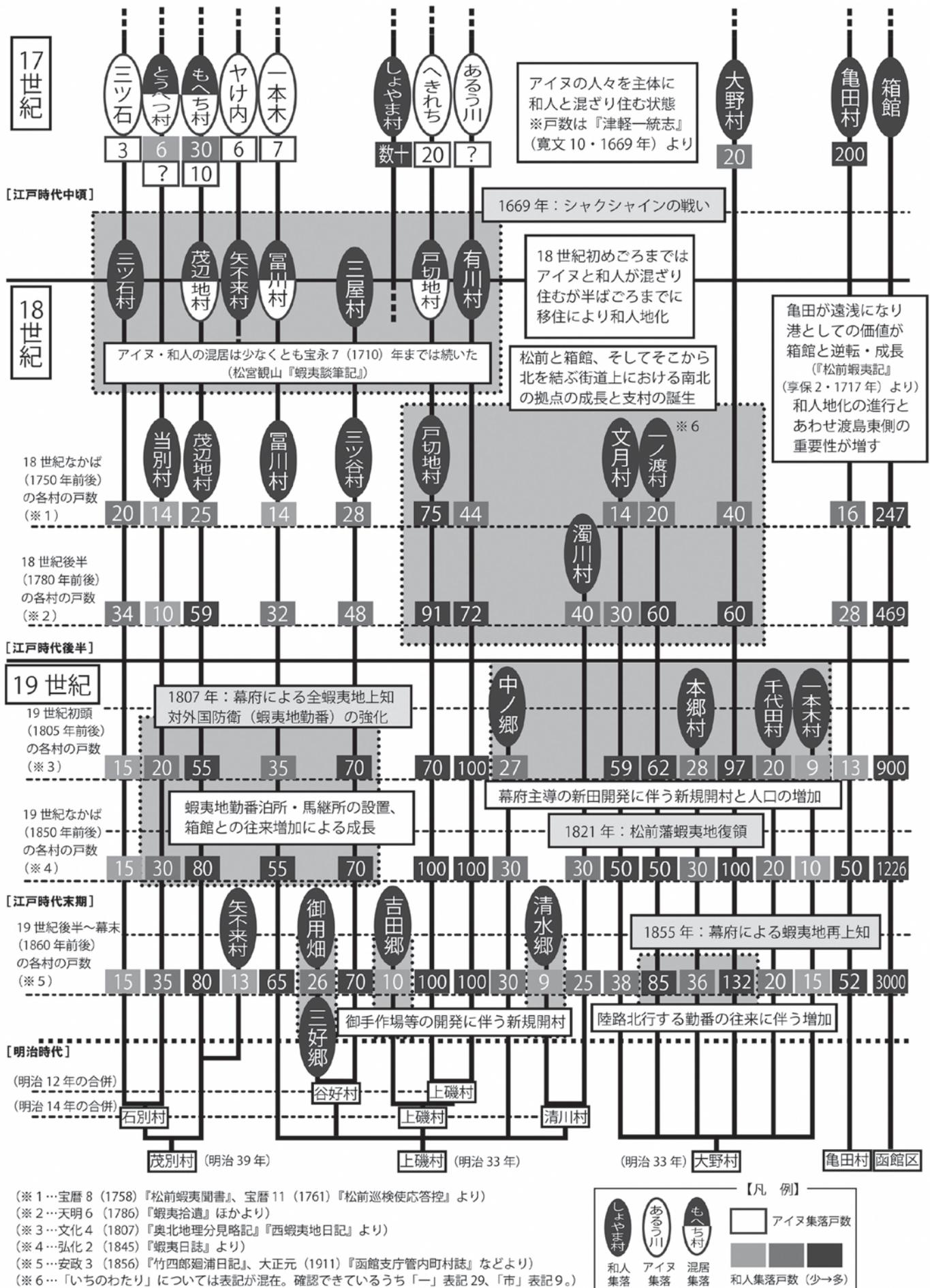


図. 史書上で確認できる北斗市地域における集落(ムラ)とその戸数の時代ごとの変遷